千住の七不思議

ー千住に伝わる七つの不思議なお話ー

片葉の葦

弘法大師が荒川の岸辺に立つと、葦の葉がその御威光に恐れ入り、風になびいていたのをやめてひれ伏しました。そのまま片葉の葦に姿を変えといわれています。

子福様

長円寺(千住4-27-5)の裏山に住む狐が悪さをするため、困った町の人は子福様(子どもの病気や肩凝り、腰痛にご利益がある神様)としてその狐を寺の境内に大切に祀りました。それ以来、お狐様は町全体の守り神となりました。

牧の野の大蛇

一緒に逃げよう」と約束をした船頭の男性は、待っても現れませんでした。恋人の裏切りに悲しんで身投げした女性は大蛇になりました。以来、牧の野(現在の千住緑町に千住桜木町あたり)に、この大蛇が現れ、行き交う船を転覆させたといいます。

金蔵寺のそばえんま

金蔵寺(千住2-63)にえんま様が安置されています。旧日光街道沿いのそば屋に毎日そばを食べに来る女の人がいました。「あのきれいな娘はどこの人？」と不思議に思ったそば屋があとをつけてみると娘はえんま堂の中へ入っていきました。それからというもの、えんま様に願い事を叶えてもらったお礼には、そばをお供えするようになりました。

千住大橋と大亀

千住大橋を架ける工事の際、どうしても橋杭が打ちこめない場所がありました。川の主の大亀がこの場所に住んでいて、亀の甲羅があたったためです。千住大橋の3番目と4番目との間を広げたところ、杭を打つことができたそうです。この場所は流れが複雑で、「亀のま」や「亀のまま」と呼ばれています。

おいてけ堀

堀切から牛田の辺に大きな堀がありました。ここでつった魚を持ち帰ろうとすると、「おいてけ～おいてけ～」と地の底からわき出るような不気味な声がし、無理に持ち帰ろうとすると葦のしげみから抜け出せなくなったといいます。

千住大橋の大緋鯉

川の主である大緋鯉が上流と下流を行来きしていました。千住大橋の橋杭を立てる際、この大緋鯉がぶつかって橋杭が倒れそうになりました。そこで橋杭1本を少し広げて立て替えたところ、大緋鯉は無事自由に泳ぐことができるようにしました。

背景図は明治13年(1880)年の迅速図。